

2025年1月9日発行
日本比較文化学会関東支部

2024年度第2号のレター発行となります。本号では、2024年12月21日(土)に東京未来大学にて開催されました「第63回関東支部例会」での支部会員の発表要旨について掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 長田 元

◆第63回 関東支部例会 ご報告◆

2024年12月21日(土)、東京未来大学において第63回関東支部例会が開催されました。当日は8名の支部会員による研究発表が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な合同例会となりました。以下、例会での会員の研究発表の要旨を掲載致します。

◆開会の挨拶: 関東支部 副支部長 郭 潔蓉 (東京未来大学)

◆研究発表:

1872年以降のムソルグスキー作品にみられるダーウィンの影響

筑波大学大学院博士後期課程
李 静怡

19世紀、チャールズ・ダーウィンの著作を代表とする生物学がヨーロッパに浸透し、人文社会の領域にも深い影響を与えた。フランス作家バルザックとロシア作家チェーホフの文学作品も生物学理論の影響を受けていることが、先行研究によって明らかにされている。しかし、生物学理論の影響を受けている領域は文学領域だけではない。先行研究者キャリル・エマーソンは、同時代の19世紀ロシアの音楽家モデスト・ムソルグスキーの作品もダーウィンの影響を受けている点を指摘している。エマーソンは、両者に共通して見られる特徴として「過程性」(process)と「突然性」(surprise)という理論的な枠組みを導入したが、楽譜を用いた説明はしていない。他の研究者もエマーソンの理論に基づきながらいくつかの曲を挙げて説明するだけで、楽譜と合わせて説明したり、ムソルグスキーとダーウィンの関係を分析したりはしていない。

この現状を踏まえ、本発表では、エマーソンが提起した生物学理論がロシア作曲家モデスト・ムソルグスキーの音楽へ与えた影響の正当性を確認したい。まず、ダーウィンの影響が示されている1872年10月18日の書簡の全文を分析し、ダーウィンの影響がどのような種類のものであったかを細かく確認する。また、「過程性」(process)と「突然性」(surprise)という、エマーソンが行ったダーウィンの理論とムソルグスキーの音楽思想の対応関係の正当性について、ダーウィンの著作を踏まえて確認する。なお、その際にはムソルグスキー作品におけるダーウィン思想の影響について、具体的な楽譜分析も併せて行う。

ムソルグスキーのリアリズムの特徴として、従来、風刺的な題材、語り口調、民衆生活の描写などが挙げられてきた。しかし、本研究によって、そこにはダーウィンを經由する生物学的思想の影響をも付け加えるべきであることが明らかとなった。

文学が映し出す日本のジェンダー問題 —多文化の視点で読み直す楊逸文学—

宇都宮大学大学院博士後期課程
鈴木 アリサ

2008年「時が滲む朝」で第139回芥川賞を受賞した中国出身の作家、楊逸は日本語を母語としない外国人作家として大きく注目された。その前作でデビュー作の「ワンちゃん」では、第105回文学界新人賞を受賞したとともに芥川賞候補にも上がり、一部では日本語が稚拙だという反応もあったものの、在留中国人の姿を広く知らしめたことで高く評価された。

「ワンちゃん」は、国際結婚で来日した中国人女性が主人公として描かれる。一昔前の国際結婚といえば、1980年代の日本の農村地域に嫁いだフィリピン人女性のイメージが強いが、2000年代は民間の結婚業者による仲介等で中国人女性も増加した。中国人女性のお見合い理由は切実で、離婚歴があつて後ろ指を刺されたり、一人っ子政策で二人目以降罰金を払ったり、といった背景がある。そこで国際結婚を通して苦しみから抜け出そうとするものの、待っていたのは家事や介護等、家庭を支える日本的な女性としての役割だった。主人公もお見合い結婚で四国の田舎に嫁いだが、亭主関白な旦那から自立するため自らの経験も活かして国際結婚の仲介人としてビジネスを始める。中国は、家事は当然のように夫婦で共に行い、改革開放以降「男女平等」がスローガンとして掲げられ、女性が仕事をして当たり前な社会となっていたため、日本に来てあまりにも異なる実態に著者は驚き、本作では働き者の中国人女性が映し出された。また、「金魚生活」(2008)では日本の専業主婦についての記述があつたり、「すき・やき」(2009)では日本で大学院修了及び就職した主人公の姉が日本人との結婚後、専業主婦となっている姿が描かれるなど、「日本人化」している現状が出てくる。

そこで本発表では「ワンちゃん」を中心に、楊逸の作品を多文化の視点から読み直し、2000年代の国際結婚の実態を明らかにすることで、日本社会が抱えるジェンダー問題を浮き彫りにする。

「子どもの話者—ボリス・パーホル『港の焚火』の和訳へ」

スロヴェニア共和国大使館
Mirjam Cuk Moishi 茂石チュック・ミリアム

スロヴェニアの現代作家のボリス・パーホルは最も翻訳されている作家の一人である。氏はトリエステに生まれ、ファシズムやスロヴェニア文化の全面禁止に苦しめられた。氏の原点と言える作品は短編集小説「港の焚火」で、その中で最初の同題短編小説である。パーホル氏の作品の中で、子ども目線の語りが特徴的であり、スロヴェニア人の子どもがどのような苦しみを体験したかが記されている。本作品の和訳を試み、話法やテーマを紹介しながら、氏の重要なメッセージを明らかにしたい。子ども話者は世界文学でよく使用されているが、なぜこの話者が使われているのかが興味深いことである。表題作で子どもがひどい体験し、子ども話者を通してこのテーマが読者まで届きやすいかもしれない。但し、子どもが語っているので、このテーマが重要ではないというのが言えない。作者にとって、子どもが無防備で自分を守れないので、戦争の最も大きい犠牲者である。作品の中で子どもが飾りなしで体験

を語っているが、子どもなので大人の世界がわからないことがあり、敵あるいは酷いことをしている側を直接に批判することもできない。すべての作品は過去のことを語っているが、「このようなことが二度と起きないように語る必要がある」と作者が思って書いたものである。

中国におけるワシーリー・エロシェンコ

野田 晃生

ロシア出身の詩人であるエロシェンコは、生後まもなくして病気のために失明し、視覚障がい者になった人物である。失明した後、彼はロシアで学問を修めた後、日本へ渡り、そこで学問を修めた。しかし、エロシェンコは、日本において反政府の会合に出席したことを理由に、海外に追放された。エロシェンコは、その後中国に渡った。中国に渡った彼は北京大学においてエスペラントの教鞭をとった。エロシェンコは、生涯を通じて、多くの作品を発表した。また、彼は、中国において、魯迅のような作家の他、北京大学の学長であった蔡元培などとも交流をもった。中国の教育、文学の発達に、エロシェンコは大きな役割を果たしたといえることができるであろう。エロシェンコは、中国、世界中において、意見、作品を発信することによってエスペラント語の有用性と平和主義を唱えた。しかし、中国における彼の生活は長くは続かなかった。エロシェンコは、後に、中国を離れ、ロシアに戻っていくこととなった。このことは、魯迅によって書かれている。中国に限らず、エロシェンコの業績は世界各地において見られ、それを我々は今日見ることができる。本発表においては、中国における彼の業績を中心にみることによって、彼の生涯を見る一助としたい。

日中両国のコミュニティ防災比較： コミュニティ構造と災害法システムの視点

奈良女子大学博士後期課程
龐 朝霞

自然災害が増加する中、行政の対応能力の限界が明らかになっている。この状況において、日本と中国の両国では、地域住民による相互扶助が災害発生直後の避難誘導や人命救助に非常に効果的であったとされている。特に中国では、社区（コミュニティ）を単位とした防災活動が展開されている。

本発表では、日中両国のコミュニティ防災の実践を比較し、地域住民の災害対応力の向上を目指す共通の目的に焦点を当てつつ、コミュニティ構造と防災法システムの観点から顕著な違いを明らかにした。

コミュニティ構造において、日本のコミュニティ防災は「地域性」と「共同性」を重視し、地域特有のリスクと住民の特性に応じた対応が特徴である。これに対し、中国の社区は行政の末端組織としての性格を持ち、特に都市部では流入人口の多さや低定住率を背景にした組織活動が行われている。農村部では村民委員会が一定の自治性を持つものの、行政の影響は依然として強い。

防災の組織化において、日本では町内会や自治会が基盤となり、住民の自発的な参加による地域特性に基づいた柔軟な防災対策が展開されている。対照的に、中国では社区減災が行政主導で進められ、民政部や地震局の設定する基準に基づき、政府の指導のもとで活動が統一的に行われる。日本が住民主体の自主防災を強調するのに対し、中国は行政主導の管理体制が中心となっており、この点が両国のコミュニティ防災における根本的な違いとして明らかになる。

高等学校の女子応援団員におけるエールの発声技法が与える心理効果

—発声に対する感情評価分析から—

東京未来大学
岩崎 智史・杉本 雅彦・金塚 基

日本の小・中学校および高等学校の教育課程においては、応援団の統制の下で集団的な応援活動が実施されるようなプログラムが多くみられてきた。近年、とくに応援団員における女子生徒のメンバーの目覚ましい活躍がみられる。そこで本研究では、応援団の集約的な応援活動の統制役割において重要な構成要素である発声に着目し、とくに高等学校の女子応援団員における発声音によって、聞き手の感情が喚起されるかどうかを検討することを目的とする。実験は、女子応援団員および一般女子のエールの発声音を収録し、被験者にヘッドフォンで視聴してもらい、多面的感情状態尺度により調査を行う。なお、主な分析方法としては、発声の習熟度を独立変数、下位尺度を従属変数とした分散分析を行い、それらの結果を明らかにするものとする。

日本文化における自律性

-日本と欧米の道徳観から見えてくること

横浜市立大学大学院博士後期課程
遠山 一明

文化人類学者ルース・ベネディクトは、名著『菊と刀』において、内面的な罪の自覚から善行を行う欧米の「罪の文化」に対し、外面的強制力から善行を行う日本文化を「恥の文化」と特徴づけた。論考では、他人の批評を過度に気にする日本文化は同調主義的で他律的な性格であると強調しているが、果たして日本文化では自律性は育たないのだろうか。この疑問が、本研究の契機となった。本研究では、社会心理学並びに教育社会学の視点を織り混ぜながら日本文化を多角的に分析していくことで「日本型自律性」の存在と形態、および獲得に至るメカニズムを解明することを目的とする。

第一章では、状況や他者との距離の違いから、日本と欧米の文化において受け入れられている道徳観の性質に着目する。日常の言語習慣（用法）から自己観が形成される。日本と欧米の人称代名詞を比較することで、導き出される自己観から双方の道徳観を理解する。

第二章では、欧米の原理重視の道徳観に対し、日本は状況重視の道徳観といわれている。この道徳観は、文化的特徴として存在するとともに、子育ての習慣（しつけ）、教育（教科書）として社会構造を支えている。この道徳観の醸成過程を様々な事例から検討する。事例として、子育ての習慣では日米の家庭で母親のしつけ方、教育においては日本と欧米の教科書の記述内容、初等教育の実態の比較を行い、双方の道徳観の相違から日本人の自律性獲得の萌芽を読み解いていく。

第三章は、芸術表現の中に存在する支配的な自律、人格的成熟の理念の存在を検証し、伝統芸能から導き出される自律の理念を検討していく。

第四章は終章となる。ここまでの様々な論証から「日本型自律性」の獲得に至るメカニズムを解明する。最終的には、文化的土壌を活かしながら、日本人が自律性を獲得する必要条件を定義する。

拉致被害者に向けた日本政府の情報発信 ～北朝鮮向けラジオ放送「ふるさとの風」の内容分析～

淑徳大学人文学部
田中 則広

本報告は、日本政府が北朝鮮に暮らすとされる日本人に向けて、日本語で実施している短波ラジオ放送「ふるさとの風」の現状と課題について、国会での議論や番組内容の分析を通じて考察したものである。

1970年代から1980年代前半にかけて、日本人が北朝鮮当局によって拉致される事件が相次いだ。これに対し、日本政府は「拉致問題は国家の主権および国民の生命と安全に関わる重大な問題であり、その解決なくして北朝鮮との国交正常化はない」という方針を掲げ、北朝鮮に対しすべての拉致被害者の安全確保と帰国を強く求めてきた。こうした方針を具体的に実行に移す手段の一つとして、日本政府は2007年に「ふるさとの風」の放送を開始した。

この放送は、北朝鮮当局への影響を意識しつつも、拉致被害者本人へのメッセージを直接届けることを目的としている。開始から17年を迎えた現在も、放送では、日本や北朝鮮をめぐる状況や拉致問題に対する日本政府の取り組み、さらに、首相と官房長官を主体とした政治家、および、拉致被害者家族からのメッセージが発信されている。また、1970年代のヒットソングなども取り上げられている。

考察の結果、「ふるさとの風」は、拉致被害者やその家族に対する直接的なメッセージの発信拠点であると同時に、北朝鮮向け民間放送「しおかぜ」との音楽イベントの共催などを通じて、政府が多面的な活動を展開していることが明らかになった。しかし、拉致問題関連のニュースが限られる中、ひとつのニュースを数回に分けて報じざるを得ないことなど、同じような内容のコンテンツが繰り返されている制作上の苦労がある。また、2002年の「5人帰国」以降、拉致された日本人のうち、日本に帰国できたのは5名にとどまるなど、解決に向けた進展が見られないといった課題も浮き彫りになった。これらの点は、放送の目的や意義を問い直す必要性を示唆している。同時に、より効果的な情報発信の方法や新たなアプローチを検討することが求められよう。